

篠原房枝作 「病氣」

- 効果音 (電話のベル)
- 山崎貴子 はいもしもし、山崎ですけど。
- 佐藤和彦 (フィルター音)あ、山崎？ おれ、佐藤だよ。(わざと明るく)おれさ、また入院決まったよ。今度も1か月ぐらいだって。
- 貴子 本当？ それで手術はいつ？
- 和彦 (フィルター音)いろいろ検査してからだから、1週間ぐらいしたらだと思ふ。でも、お前来るなよ。大事な試験前だろう？
- 貴子 どうして？ 今度だって危ないのでしょうか？ 試験なんてまた受けられるけど、和彦君にもしものことがあったら、わたし…。
- 和彦 (フィルター音)何言ってるんだよ。必ず手術室から出てくるよ。それよりも、山崎は自分の道をしっかり歩けよ。お前が頑張る分、おれも手術室で頑張るから。それじゃな、試験終わるまで絶対来るなよ。
- 効果音 (受話器を置く音)
- ナレーション 佐藤和彦と山崎貴子は高校3年生。学校は別々だけれど、小学校、中学校と同級生で、幼なじみの二人です。和彦は、中学2年の体育祭の時、競技中に急に倒れ、それからというもの、季節ごとに足の手術を幾度もしてきました。けれどもいまだにその詳しい原因は分からないまま、和彦は再び苦しい危ない手術を受けることになったのです。そんな和彦のことを、クリスチャンである貴子は、教会の高校生会でリーダーの石川さん始め、仲間に祈ってもらいました。
- 音楽 (「いつくしみ深き」)
- 石川 それじゃ今日の祈り課題は…。受験生のために、新しく来た人のために、それから山崎さんの友人の佐藤君の手術の成功のためにお祈りしてください。
- 小林 神様、どうか佐藤君の手術を守り、あなたのみ業によっていやしてください。
- 小川 主よ、この手術によって、佐藤君があなたを知ることができますように。
- 貴子 お父様、佐藤君の命をあなたが守り、彼がこの高校生会に来ることができるよう導いてください。
- 石川 愛なる神様、佐藤君をあなたの愛で守り、手術が成功しますように。
- ナレーション こうして、毎週高校生会のメンバーは、佐藤君の病のために祈り続けました。そして、神は祈りにこたえてくださり、彼の手術は成功しました。ところが――。
- 効果音 (電話のベル)
- 貴子 はい、山崎ですけど。
- 和彦 (フィルター音)山崎。(力なく)おれ、もうどうなってもいいんだ。
- 貴子 和彦君なのね？ 何を言ってるの？ 手術は成功したのでしょ。どうしたの？ あなたらしくないじゃない。
- 和彦 (フィルター音)おれなんか、おれなんかどうなったっていいんだ！ なんだよ、あいつら、友達だなんて口先だけで、おれのことなんて「またか」って感じで、もうだれも来ないんだ。中本でさえそうさ。親友だなんて、今度は一度も来てないよ。おれの手術のこと知ってるのに

…。人なんて信じられないよ。結局、みんな自分のことしか考えていないんだ。

貴子

何を言ってるの！ 少なくともここに1人は、あなたのこと心配しているのがいるわよ。

和彦

(フィルター音) ああ、それは信じるさ。でもおれ、もうこんな所はイヤなんだ！ 原因も分からずに、足を切り刻まれて…。だれもおれの気持ちなんて分からないんだ！ なんておれがこんな目に遭わなければいけないんだ？!

貴子

(いたわるように) どうしてそんなこと言うの？ もっと自分の体を大切にしてよ。

和彦

(フィルター音) おれ、ほんとはまだ歩いちゃいけないんだ。

貴子

な、なんてことしているの！ 自分のこと殺す気？ お願いだから電話切って、病室へ戻って。和彦君一人の体じゃないのよ。

和彦

(フィルター音) イヤだ。戻らない。いっそのこともう足なんて動かなくなればいい。

貴子

バカ！ いつからそんな弱音吐くようになったの？ だれが心配してくれないって？ あのね、今だから言うけど、和彦君の顔も知らない人たちが、ずっとあなたの手術のことを真剣になって祈ってくれてたのよ。

和彦

祈ってくれてた…？

貴子

そうよ。わたしの教会の高校生会の仲間なの。ほんとに、みんな心をついにして、あったこともない和彦君のことを心配して祈ってくれてたの。和彦君の知らないところに、信じあえる友達がいるの。(だんだん涙声に) ねえ、和彦君のつらい気持ち、わたし痛いほど分かる。でもお願いだから、病室に戻って。これ以上、自分を痛めつけないで。あなただけの体じゃないの。心配している人が大勢いるのよ。分かって。

和彦

(フィルター音) …分かったよ、山崎。泣くなよ。おれ、戻るから。それじゃな。お休み。

効果音

(受話器を置く音)

ナレーション

貴子は、翌日の礼拝後、教会の高校生会のメンバーの石川さんと小林君と共に、和彦の病室を訪ねました。

効果音

(ドアのノック、開閉音)

貴子

こんにちは。

和彦

山崎！ お前、試験終わったの？

貴子

うん、今日ね。そこから直行よ。と言っても教会に少し寄ったけど。あのね、ほら教会で祈ってくれていた石川さんと小林君。昨日の電話のこと話したら、「ぜひ和彦君のお見舞いに行こう」って言ってくれたの。

石川

初めまして。石川です。

小林

小林です。どうですか、足の具合？

和彦

え、ええ、まあなんとか…。

石川

佐藤君のことは、貴ちゃんからよく聞いているんだ。音楽やってて、バンドを組んでいるんだって？ 実は僕もベース弾いているんだけど、バンドを組みたいと思っているんだ。(FO)

ナレーション

話しているうちに、和彦は、貴子の連れてきた初めて会った友達に、不思議なくらい素直に心から打ち解けていきました。そして初対面の時分にこんなにも親しく温かく接してくれるクリスチャンたちに、何か今までの友達にも自分の中にもないものを感じました。

小林

それじゃまた来ます。あの、これ読んでください。

和彦

ありがとう。

ナレーション

それから、高校生会の仲間は、貴子がいけなくてもたびたび和彦の病室を訪ねました。そ

して次第に和彦の沈んでいた心は明るくなっていきました。ある日、貴子が病室を訪ねると、石川さん、小林君のほかに、和彦の親友の中本君、それから教会の田中さんと小川さんも来ていました。

和彦 おう山崎！ 今日教会のみんな、来てくれたんだ。それに中本も。お前に怒られたって。

石川 貴ちゃん。すごいんだ、佐藤君、来週退院できるんだって。

貴子 本当?! 今回は長引きそうだって言ってたのに、本当に大丈夫なの？

和彦 ああ。もう自分の力で足上げられるし、医者が「不思議だ」って検査したけど、「治ってる」って驚いてたよ。

ナレーション 貴子は、あまりの驚きと喜びに、声も出ないまま、高校生会で祈ってくれた仲間の顔を一人一人見つめました。だれもが神様の力を確信したように、うなずいていました。

貴子 よかったわ！ ねえみんな、イエス様賛美しない？

小林 待ってました！

石川 僕もそう思って、さっき、佐藤君の部屋からベースならぬ、これをね。(ギターの爪弾き音)

音楽 (ギターのごospel)(FO)

ナレーション こうして楽しいひと時が過ぎた後で――。

石川 それじゃ、そろそろ帰ろうか。

和彦 今日本当にいろいろありがとう。退院したら… おれ、教会に行くから。その時はよろしく。それじゃ気をつけて帰ってな。さよなら。

一同 (口々に)「がんばってね」「さよなら」

貴子 和彦君、本当？ 教会来てくれるって？

和彦 ああ、行かせてもらうよ。おれ、ずーっと考えてたんだ。教会の中に、何かがある。お前や、石川さんや、みんなの心の中に何かがある。何か、今まで知らなかった、本当にあったかい何かがある。そいつを僕も知りたくなったんだ。

ナレーション 貴子は、心の中で「神様、感謝します」と何度も繰り返していました。自分は決して多くを語れなかったのに、神様は、和彦の心を開くために、教会の仲間の一人一人を用いてくださいました。その祈りを聞いてくださったのです。あの和彦の病の不安と苦しみを思うと、貴子の胸は痛みました。でもその病さえ、それを通してご自身の深い愛を知らせるための、神のご計画のうちにあったことを、彼女は今知ったのでした。

聖書の言葉 神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。(ローマ人への手紙 8:28)

<完>